46　特別指導教官の取り組みー高等課程１年の授業実践からー

自立支援局　理療教育・就労支援部部理療教育課　浮田正貴，島村明盛，藤原太樹，牧邦子，
水元ひろみ，高橋忠庸，伊藤和之，柴原繁俊

【はじめに】

理療教育では、視覚障害に加え難聴を有する、中途視覚障害で基本的な学習手段を身につけていない、学習手段としての点字やパソコンの活用が困難、先天性の全盲で学習経験や運動経験が少ない、生活面に支援が必要など様々な利用者が入所している。このような現状からより質の高い授業を提供し、よりきめ細やかな支援ができるように特別指導教官が配置された。

【対象者の実態】

高等課程１年の３名は、盲学校出身で先天性の視覚障害である。使用文字は読み書きともに点字である。実技実習では、両手を前にまっすぐ伸ばすなどの全身の動き、指折り数えるなどの手の動き、上下方向や左右方向の認知、長さや高さの比較に課題がみられる。学習では、教科書を読んだ経験が少ない、ノートを作成したことがないなどの課題がみられる。授業中は、集中力が持続しないことや情緒が不安定になることもある。

【実践内容】

身体の動きでは、できる姿勢を活かしながら自分で動き易い姿勢を見いだすことを重点に置いた。上肢の動きでは、各関節の動きを意識できるように、授業者が関節に手を添えて触られた感覚で意識できるようにした。母指の使い方では、母指で圧迫する動作や垂直圧を意識できるようにシリコンボールを活用した。長さ、高さ、大きさ、立体は、積み木などを活用して理解できるようにした。バスタオルや手ぬぐいの面と辺は、長辺と短辺の２辺に玉留めをつけて辺の長さを数値化した。学習方法の確立では、学習内容を箇条書きにした点字の資料を提示し、読むことや要点を書き出すことを指示した。

【結果と考察】

身体の動きは、自分の身体が無理のない姿勢で施術ができることや施術のしやすさを実感することができた。上肢の動きと母指の使い方では、繰り返し時間をかけて練習することで、揉んだり圧迫したりすることができ、力度の調節もできるようになった。積み木などを活用することで、長さ、高さ、大きさ、立体の概念を知ることができた。バスタオルと手ぬぐいの長辺と短辺を数値化することで、辺の長さや大きさの違いを理解することができた。学習方法の確立では、箇条書きにした点字の資料を活用することで、読むことができ、要点を書き出し知識の定着に結びつけることができた。また、記述式問題を解答することができた。このように、学習経験や運動経験が少ない盲特別支援学校出身の利用者には、個々の実態や特性を把握し、実技実習や授業での支援方法を工夫することで、実技力の向上や知識の定着が図られるものと考える。個々の利用者の課題に対しては、支援者が個別に対応することが重要であり、特別指導教官の質の向上や支援者側の支援体制の確立が必要である。